藤尾という女

Junko Higasa

夏目漱石は『虞美人草』で「結婚観」に関して、親の取り決めに従う古風な小夜子、現代流行の最先端を行く藤尾、思慮深い糸子という 3 人の女性を書き分けた。時代の因習の中に否応なく自己を埋没させる小夜子と、「今」の時代の波に積極的に乗ろうとする藤尾。3 人の中で「時代」に翻弄されず、歴史的に変わることのない女の真の幸せを確保できるのは、自分の足元を見つめて柔軟に対応できる糸子だけであろう。

漱石は「藤尾のような女は(小説の中で)殺さずにいられない」と言ったほど、男を翻弄する藤尾タイプは嫌いだったようだ。だが私は藤尾こそが 3 人の中で一番生きることに苦しんだ女性だったのではないかと少し同情する。自分を滅せることが出来ればそれなりに幸せである。状況に応じて自分を変えることが出来れば、受け取る幸せの形も変わる。だが自分を変えられないことほど苦しいことはないのではないだろうか？親の言いつけに従って小野さんの妻となる日を待っていた小夜子は、もし小野さんが藤尾と結婚したとしても、描いていた未来を失った空虚感はあるものの、貧しく取り柄もないと自覚する自分と、たとえ外面上であっても女性の理想を身に付けている藤尾との比較の中で諦めることが可能であったろう。甲野さんに嫁げるかどうか漠然とした揺らぎの中で女としての準備を怠らなかった糸子は、自分に相応しい未来を待ち受けることができたろう。だが藤尾だけは自分に対する呪縛から逃れられなかった。だから藤尾は死なずには安寧を得られなかった。従って小説の最後の藤尾の死は、男性側の女性論から見れば「女の小細工の崩壊」であっただろうが、女の性(さが)方向から見れば「藤尾という女の魂を救う唯一の方法」であったのではないかと思う。作り物の理想美で覆われていた藤尾は、決して美しい女ではなかった。だが生が終わった瞬間、初めて自分を縛っていた欲望を含めたあらゆる意思から解き放たれて、天然自然の真実の美になることが出来た。だからこそ、その亡骸は元来の美を輝かせたのだ。

では何故藤尾は自分を変えることが出来なかったか？それはまず「持てる者」に付随する負荷に始まる。藤尾には金がある。美貌もある。しかも母のための家督相続という見えない重石もある。そういった本人の責任とは無関係だが切り離せない環境の中で、藤尾は進歩的にかつ保守的に自分を愛した。それに相応しい人生を求めたのがまず彼女の呪縛である。だが彼女の間違いの本質はそこではない。彼女には自己愛はあったが「自分」はなかった。男の地位に自分の価値を見出そうとしたことは他力本願。男にとって抑圧だったろう。彼女の悲劇は自分を「物質」に換算してしまったこと。自己の物質的価値に相応しい結婚を夢見たこと。自分は男の求める金銭と美貌を備えている。良妻賢母になるべく教養を身に着けつつある。だがそれは「自分」という本体のない外装価値に過ぎず、男にとっては近寄りがたい武装となる。その武装にたじろぐ小野さんを「金時計」で繋ぎ止めても「名誉生活」の中で男よりも優位に立ちたい自己愛に支配された藤尾の生き様は「自分」を持てなかった人間の悲劇である。

小夜子も糸子も自分の生きる文化圏を知っていた。だが藤尾は最先端の文明の幸福の錯覚に飛び込んでもがいていた。彼女は本当の自分ではなく、男に投影された自分に幸せの価値を求めた。そのために男は高価な鏡でなければならなかった。(2013.3.14)